

芹沢俊介\*: 日本産テンナンショウ属の再検討 (2)\*\*  
ムロウテンナンショウ群

Shunsuke SERIZAWA\*: Studies on the genus *Arisaema* in Japan (2)  
Group of *Arisaema yamatense*

ムロウテンナンショウ *Arisaema yamatense* とスルガテンナンショウ *A. sugimotoi* は、仏焰苞腋部の内面に微細な乳頭状突起を密生することで、他のマムングサ類から容易に区別できる種類である。しかし、この乳頭状突起があまりにもはっきりした特徴であるためか、両種の他の形態的特徴は従来それほど検討されていない。ところが、四国の山地には、他の点ではムロウテンナンショウに似ているが乳頭状突起を欠く植物が分布している。そこで、本報ではこの植物を記載すると共に、これら3種類のテンナンショウについて比較検討してみたい。所蔵標本の検討を許された京都大学理学部 (KYO)、東京大学理学部 (TI)、同農学部 (TOFO)、国立科学博物館 (TNS) の標本室の皆様には深く感謝いたします。

種・亜種の検索表

1. 仏焰苞は葉より後に展開し、腋部内面は緑色、平滑である。四国に分布 .. *A. abei*
1. 仏焰苞は葉と同時に展開し、腋部内面は帯白色、乳頭状突起を密生する。本州に分布。
  2. 花序附属体の先端は僅かにふくらみ、濃緑色となる。仏焰苞の腋部は通常筒部より短い ..... *A. yamatense* subsp. *yamatense*
  2. 花序附属体の先端は白く、著しくふくらんで前屈する。仏焰苞の腋部は筒部より長い ..... *A. yamatense* subsp. *sugimotoi*

1. *Arisaema yamatense* (Nakai) Nakai, Bot. Mag. Tokyo 43: 539 (1929); F. Maekawa, Bot. Mag. Tokyo 48: 49 (1934), sub var. *typico*; Kitamura, Acta Phytotax. Geobot. 10: 192 (1941); Kanai, Distr. Maps 83 (1958); Ohashi et J. Murata, Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo III, 12: 309 (1980).—*A. japonicum* var. *yamatense* Nakai, Bot. Mag. Tokyo 31: 284 (1917).—*A. yamatense* var. *integra* Nakai, Bot. Mag. Tokyo 43: 539 (1929).

Hab. Honshu (Fukui, Mie, Shiga, Kyoto, Nara, Osaka, Wakayama and Hyogo).  
subsp. *sugimotoi* (Nakai) Ohashi et J. Murata, Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo

\* 愛知教育大学生物学教室 Department of Biology, Aichi University of Education, Kariya-shi, Aichi 448.  
\*\* 本誌 55: 148~156 (1980) から続く。

III, 12: 310 (1980).—*A. sugimotoi* Nakai, Bot. Mag. Tokyo 49: 424 (1935); Kanai, Distr. Maps 82 (1958).—*A. yamatense* var. *sugimotoi* Kitamura, Yagaihakubutsu 4: 1 (1942).—*A. sugimotoi* form. *integrifolium* Nakai, Ic. Pl. As. Or. 2: 128, t. 52 (1937).—*A. sugimotoi* form. *variegatum* Honda, Bot. Mag. Tokyo 54: 4 (1940).—*A. yamatense* var. *intermedium* Sugimoto, Fl. Shizuoka 488 (1967).

Hab. Honshu (Shizuoka, Nagano, Aichi and Gifu).

ムロウテンナンシ ョウ *A. yamatense* は、名の通り大和室生山産の標本に基づき命名されたテンナンシ ョウで、近畿地方の低山地には普通に見られる。葉は 2 枚、第一葉の葉鞘（偽茎）は長く、鳥趾状複葉の葉軸は斜上し、小葉は同一平面上にならばない傾向が著しい。第二葉は第一葉に比べてかなり小さく、その柄は概して短く、時にはほとんど無柄となる。仏焰苞は葉とほぼ同時に開き、通常緑色、稀に帯紫色、筒部は円筒状で長さ 6~10 cm、口辺は狭く開出する。舷部は卵形~五角状卵形、通常筒部より短く、平面的で腕状にふくらまず、したがって腊葉標本では中央部にほとんど折れ重なりしわとなる部分ができない。舷部先端は急に細まり、尾状鋭尖頭となることが多い。内面は乳頭状小突起を密生し、帯白色である。白条は目立たない。舷部下部は他の多くのマムシグサ類とは逆に中央部の緑色が濃く、両側が半透明になる。花序附属体は長さ 4~9.5 cm、基部は太いが上部は前曲して次第に細まり、先端はやや頭状にふくらんで濃緑色となる。先端部の太さは、近畿中部の集団では細いが、南紀の集団ではやや太い。分布域は行政区画上の近畿地方とほぼ一致するが、北は福井県まで広がっている。静岡県植物誌 (1967) によれば伊豆半島にもあるというが、標本は確認できなかった。花期は 4 月下旬~5 月下旬である。

スルガテンナンシ ョウ *A. sugimotoi* はムロウテンナンシ ョウによく似た種類であるが、花部の特徴が異なる。すなわち、仏焰苞筒部はあまり長くなく 4.5~8 cm、舷部は筒部より長く 11.5 cm に達し、卵形、先端は次第に細まり鋭尖頭となる。仏焰苞舷部は腕状にふくらまず、むしろ辺縁が拡がり、そのため腊葉標本では辺縁部に折れ重なる部分ができる。花序附属体の先端は白く、急に前屈して著しくふくらむ。ただし、附属体先端の形には変異があり、中には愛知県面ノ木峠産植栽品（芹沢 27750, 図 1a）、岐阜県板取村新谷産（芹沢 27895）などのように前屈せずややふくらむだけの個体もある。このようなものにエンシ ョウテンナンシ ョウ *A. yamatense* var. *intermedium* の名が与えられている（杉本, 1967）が、この型はスルガテンナンシ ョウの集団中に散発的に見られる極端形にすぎず、典型的なものとの間にさまざまな移行型（図 1b）もあり、分類群として区別されるべきものではない。大橋・邑田 (1980) はこの名をムロウテンナンシ ョウの異名とし、ムロウテンナンシ ョウの分布域に愛知県をあげているが、愛知県には真のムロウテンナンシ ョウは分布していないと思う。分布域は金井 (1958) の分布図に示されているように、静岡県東部から岐阜県にかけての東海地方である。鈴鹿山脈北

部や関ヶ原周辺にはムロウテンナンシヨウもスルガテンナンシヨウも見られない地域があり、そのため両者の分布域は互いに接触していない。花期は4月中旬～5月下旬である。

このように、ムロウテンナンシヨウとスルガテンナンシヨウは、いくつかの点で相互に区別することができる。分布も異所的である。しかし、一つ一つの個体について見れば、スルガテンナンシヨウの中にも前述のエンシュウテンナンシヨウと命名された型のようにムロウテンナンシヨウに似た形の花序附属体を持つものがあり、ムロウテンナンシヨウの中にも和歌山県串本町大島産の標本(芹沢 27753)などのよ

うに仏焰苞の形がスルガテンナンシヨウに似たものがある。両者の差異は、非常に顕著であるとは言いがたい。分布域の差を考慮すると、両者は大橋・邑田(1980)のように同一種内の亜種として扱うのが適当であろう。

## 2. *Arisaema abei* Serizawa, sp. nov.

Herba perennis. Tuber depresso-globosum, 2-7 cm diametro; haud proliferum. Cataphylla 4-5, inferne tubulosa, primo herbacea albo-brunnea maculata postea membranacea, intima longissima 20-70 cm longa. Euphylla 2, petiolis inferne vaginatis, lamina pedatisectis; euphyllum inferius majus, vagina tubulosa 35-90 cm longa ore dilatato, petiolo praeter vaginam 8-15 cm longo, axibus lateralibus laminae ascendentibus 9-18 cm longis, foliolis 9-15, anguste ellipticis vel obtusate ellipticis apice acuminatis basi cuneatis margine integris vel denticulatis, foliolo medio maximo 10-27 cm longo 3.5-10 cm lato petiolulo 1.5-8 cm longo, foliolis ceteris breve petiolulatis, sessilibus vel plus minusve adnatis, exterioribus minoribus, extimis 5-14 cm longis 1.5-3 cm latis; euphyllum superius plerumque multo minutum, vagina 0-3 cm longiora quam euphylli inferior, petiolo praeter vaginam brevissimo generaliter 0-1 cm longo raro usque 3 cm longo, foliolis 5-11, foliolo medio 6-20 cm longo 2-6 cm lato petiolulo 0.3-3.5 cm longo. Pedunculus erectus 4-17 cm longus. Spatha inferne tubulosa superne laminaris, tubo 6-10 cm longo 1.5-2.5 cm diametro ore anguste dilatato, lamina ovata vel late ovata 4.5-

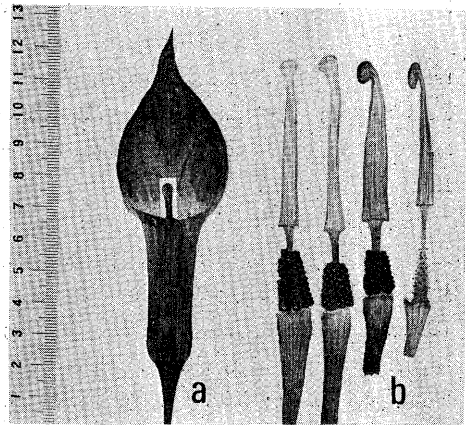


図1: スルガテンナンシヨウ *Arisaema yamatense* subsp. *sugimotoi*: a: 花序附属体の前屈しない極端形 an extreme form (芹沢 27750). b: 花序附属体の変異 variation of spadix-appendages.

9.5 cm longa 3-5.5 cm lata apice acuminata ascendente plana haud naviculata viridi vix albo-striata utroque lateribus partis inferioris pallidioribus semi-translucentibus. Spadix dioicus, conoideus, mas 1.5-2.3 cm longus femineus 1.5-3 cm longus; appendix spadicis gracilis 5.5-9 cm longa superne prorsum curvata apice plus minusve complanata rugosa 2.5-5 mm lata, basi truncata petiolo 0.4-1.5 cm longo sine staminodiis.

Hab. Shikoku. Pref. Tokushima: Mt. Kootsu-san, Yamakawa-machi (S. Takafuji no. 1237, June 1, 1977, KYO); Mt. Kurogasa-yama, Ichiu-mura (H. Kato s. n., June 30, 1975, AICH); Kenmin-no-mori, Mt. Tsurugi-san, Higashiyayama-mura (C. Abe no. 38414, June 29, 1968, AICH); near Minokoshi, Mt. Tsurugi-san, Higashiyayama-mura, alt. ca. 1350 m (S. Serizawa no. 24727, July 3, 1976, AICH-**holotype**, fig. 2); *ibid.* (S. Serizawa no. 24728, AICH); Otsurugi-dani, Mt. Tsurugi-san, Higashiyayama-mura, alt. ca. 1400 m (S. Serizawa nos. 22441-22442, July 22, 1975, AICH); Mt. Sanrei, Higashiyayama-mura, alt. ca. 1350 m (S.

Serizawa nos. 24791-24794, July 5, 1976, AICH). Pref. Ehime: between Hacho-zaka and Tsuchigoya, Mt. Ishizuchi-san, Saijo-shi, alt. ca. 1200 m (S. Serizawa no. 21820, May 28, 1975, AICH); *ibid.* cult. in Tokyo (S. Serizawa nos. 22232-22233, June 26, 1975, AICH); Mt. Iwaguro-yama, Omogo-mura, alt. ca. 1650 m, cult. in Tokyo (S. Serizawa nos. 22236-22237, June 26, 1975, AICH); Mt. Omogo-san, Omogo-mura, alt. ca. 1400 m (S. Serizawa no. 21884, May 29, 1975, AICH).

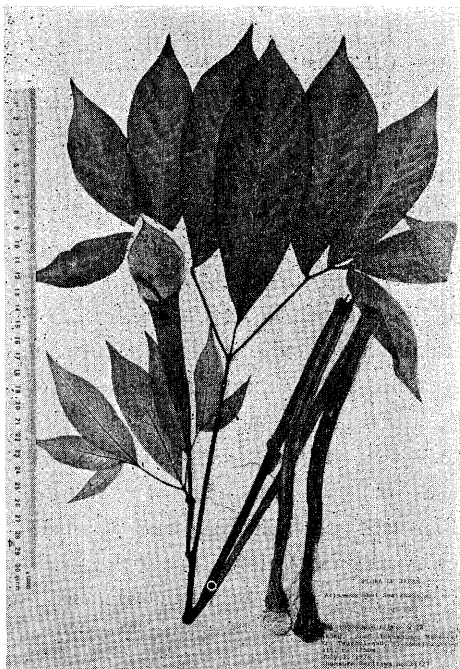


図 2. ツルギテンナンショウ *Arisaema abei* (基準標本, 芹沢 24727, ♀).

ツルギテンナンショウ *A. abei* は四国山地のブナ帯に分布するテンナンショウの一種である。葉は 2 枚、第一葉の葉鞘は長く、全高の 2/3~3/4 に達する。第二葉は第一葉に比べてかなり小さく、しばしばほとんど無柄状とな

る。小葉は第一葉で9~15枚、葉軸は斜上しよく発達する。仏焰苞は葉が展開した後に開き緑色、筒部は長さ6~10 cmあり、口辺は狭く開出する。絨部は卵形~広卵形、筒部より短く、平面的で腕状にふくらまず、先端は短く鋭尖頭になる。内面は緑色、乳頭状突起はなく、白条は目立たず、下部中央は濃色、両側は淡色で半透明となる。花序附属体は細く、長さ5.5~9 cm、上部は前曲し、先端はやや太まって多少扁平になり、幅2.5~5 mm、黄白色でしわがある。生育地は標高1100~1700 mの林内で、個体数も剣山や石鎚山の周辺ではそれほど少なくはない。花期は6月中旬~7月上旬、日本産の本属植物の中では最もおそいものの一つで、7月下旬になっても残花を見ることがある。

本種は、花期がおそく仏焰苞は葉の展開後に開き、絨部内面は平滑で乳頭状突起を欠くことにより、ムロウテンナンショウから容易に区別することができる。花序附属体先端部の形状も異なる。しかし、その他の形質に関しては、両者は多くの共通点を持っている。特に第二葉が小さく、しばしば無柄状になること、葉軸が斜上し、小葉は同一平面上にならばない傾向が著しいこと、仏焰苞絨部は平面的で白条が目立たず、下部中央が濃色、両側が淡色で半透明になることなどは、他のマムシグサ類にはほとんど見られない特徴である。これらの特徴から判断して、両者はかなり近縁なものであろう。

ところで本種は、最初1975年春に石鎚山で採集し認識したものである。ところがその年の夏に徳島の故加藤芳一氏を訪ねた際、偶然のことから阿部近一氏が剣山で同一物を採集され、問題にされていることを知った。そこで翌年7月に阿部、加藤両氏と共に剣山周辺を歩き、多くの資料を得た。基準標本(図2)はこの時の採集品である。この採集の際加藤氏は大変な悪路をずいぶん無理をして山奥まで車で案内してくださった。本種の記載にあたり阿部、加藤両氏に深く感謝すると共に、徳島県のフロラの研究にうちこまれ将来を嘱望されながらも昨年志半ばにして長逝された加藤氏の御冥福を、心からお祈りする次第である。

### Summary

The *Arisaema yamatense* group in Japan consists of three taxa, i.e. *A. yamatense* subsp. *yamatense*, *A. yamatense* subsp. *sugimotoi* and *A. abei*. *A. abei* is distributed in Shikoku, and characterized by the smooth lamina of spathe, the more or less complanate and rugose appendage of spadix, and the late flowering season.

### 正 誤 (Errata)

	頁 (Page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
Vol. 55	313	14	Okanurina	Okamurina